「日々の理科」（第 3034 号）　2022, 11, 27

「皆既月食と天王星食の記録（８）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

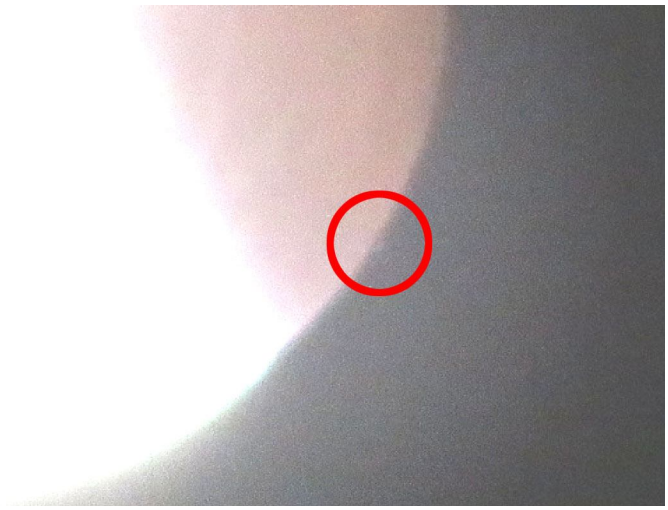
お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所 研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

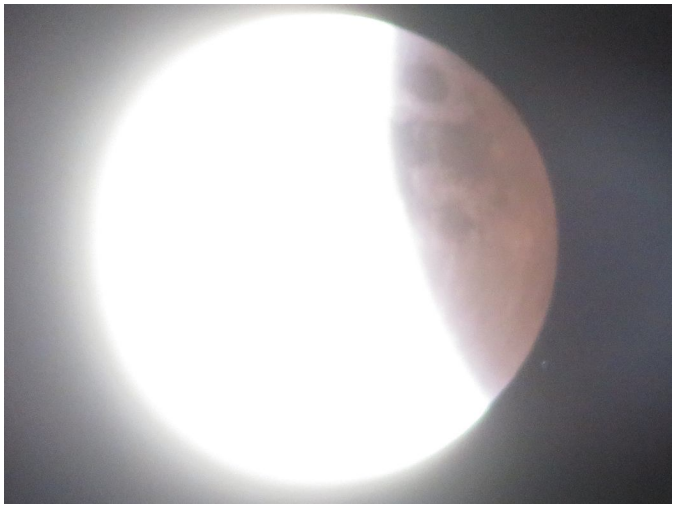
月が天王星をのみ込んだあと、すぐに皆既月食は終了し、部分月食に戻った。今度は、月に左側から太陽光が戻り始めてきた。

ここで再び「ターコイズ・フリンジ」が観測された。皆既直前よりも、より月の高度が上がり、地上光の影響を受けにくい領域に入っていたため、明暗境界線付近の青い光が、より鮮明に写っていた。

ターコイズ・フリンジが終了したら、次に狙うべき対象は、最初から決まっていた。「天王星の再出現」である。しかし、その撮影が難しいことは、撮影前からよくわかっていた。問題は部分月食中に起きる現象だという点で、しかも半月よりも輝面比が大きな状態で天王星が出て来るからだ。相当に露出を上げないと、5.7 等の天王星は写らないと計算していた。



これが月の縁から再出現した天王星の「おぼろげな姿」である。赤〇を付していなければ、絶対に気づかないだろう。これが精いっぱいの写真だった。



数分後には天王星が月から離脱し、ややはっきり写っていた。半月に近い輝度の月のわずか 0.1°以下の位置に、約 6 等星の惑星があるのだから、撮影は困難に決まっている。しかし、一応撮影には成功した。

その後、月は「順調に回復」し、何事もなかったようにもとの満月に戻った。私も家に戻った。